■「コールドフォイル実演会」……鬼頭印刷㈱

「インラインUVキャスティングシステム」公開

箔・ホログラム技術を披露　総合価値印刷物の提供

情報伝達媒体の一翼を担う印刷物。この印刷物に「価値」を付加することで、さらに新たな領域を拓こうと果敢に挑戦している鬼頭印刷㈱（鬼頭則夫社長）。同社で、新たな展開の大きな武器として活躍するのが、リョービ㈱が開発した「RYOBI755インラインUVキャスティングシステム」である。同機の披露を兼ねた「コールドフォイル実演会」が、6月12日午前・午後の2回に分け開催された。実演会には、中部・北陸から90名が訪れ、特殊加工の持つ魅力を実感した。

「コールドフォイル実演会」で挨拶する鬼頭社長

■箔・ホログラムの魅力をアピール

実演会冒頭、鬼頭社長が挨拶に立ち、「休日にもかかわらず、大勢の方においていただき感謝申し上げる。やっと納得できる製品ができるようになり、実演会を開催した。ゆっくりご覧いただき、コールドフォイルの活用を検討いただければ幸いである」と述べた。

続いて、リョービイマジクスからシステムの持つ構造・機能などについて、実演を交えながら説明が行なわれた。

「インラインUVキャスティング・フォイリングシステム」は、UVニスと特殊フィルムを使いインラインでホログラム加工を施すことができる「キャスティングシステム」と、UV硬化型の接着剤を使いインラインで箔押しをする「フォイリングシステム」が兼用で行なえる。

ホログラム加工をする場合は、印刷物にUVニを塗布し、その上に細かな凹凸模様が付いた専用のフィルムを被せ、そこにUV照射することにより、フィルムの微細な凹凸模様がそのままニスコーティング表面に転写されるという仕組み。ニス塗布部にできたフィルムの凹凸部分が光の反射によって虹色に見える。

このホログラム加工に使用するフィルムは、標準的な図柄のほかに、顧客の要求に応じてカスタムデザインをすることもできる。このフィルムは複数回繰り返し使用ができる。

一方、箔押しの場合は、印刷ユニットまたはコーティングユニットで、箔を載せたい部分にUV硬化型の糊を塗布し、箔を印刷物の糊の塗布部に固着させる。UV照射して糊が硬化した後は、接着部以外の糊が用紙から剥がれ、ユニット内に巻き取られる。

今回の実演では、「RYOBI755インラインUVキャスティング・フォイリングシステム」により、箔及びホログラム印刷が行なわれた。同社で稼働するシステムは、印刷ユニット5色+ニスコーターユニット+キャスティング・フォイルングユニットの構成になっており、UVランプは、印刷ユニット1／2胴目間のインターデッキ（5胴目に移設が可能）に1灯と、キャスティング・フォイリングユニット部（排紙部への移設が可能）に2灯を装備している。

まず、①白紙に印刷ユニットの5胴目でUV硬化型の糊を塗布、フォイリングユニットで箔押しを行ない、②箔が印刷時に離れないようにアンカーニスを施し、インターデッキでUV照射。その後、CMYKの4色印刷を行ない、排紙部でUV照射。さらに、③コーティングユニットで全面UVニスを塗布し、キャスティングユニットでホログラム加工を行なう、という工程で300枚のサンプルを作成。

箔及びホログラム加工を短時間で処理するパフーマンスを実演するなかで、箔とホログラムによる視覚効果がアピールされた。参加した見学者からは、一般印刷物には見られない高級感ある印刷物に高い評価があった。

【システムの特徴】

①印刷物にインラインでホログラム加工または箔押し加工が可能。②RYOBI750シリーズにインラインで搭載できるため、省スペース化が可能。③フィルムは多様な模様を準備。カスタムデザインも可能。また、フィルムは巻き戻し数回の繰り返し使用が可能。④箔押しはコーティングユニットを使用して接着剤を塗布するため、箔の固着力が強い。⑤UVランプは、キャスティング・フォイリングユニットと排紙部で兼用が可能。約3分で交換ができる。⑥グリッパーで確実な用紙の搬送を行なうので、安定した見当精度でホログラム加工や箔押し加工が可能。⑦ホログラム加工や箔押し加工をしないときは、ランプユニットは上昇し、通常印刷時の用紙搬送に影響はない。

【鬼頭社長とのインタビュー】

特殊加工・特殊表現は、提案型商品として大きな武器に！

■箔・ホログラムによる「総合価値」

今回の実演会に併せ豪華なサンプル帖が制作された。サンプル帖には、「プロセス4色+ホログラム転写」「プロセス4色+マット転写」「ホログラムコールドフォイル+プロセス4色」「コールドフォイル+プロセス4色」「コールドフォイル+プロセス4色+マットニス」などのサンプルのほか、ホログラム・箔のカラーチャートなどが盛り込まれている。

本紙　豪華なサンプル帖ができましたね。

鬼頭　何とか実演会に間に合わせることができました。製品としては手探り状態で、まだまだ勉強中です。サンプルをさらに充実させ、特殊加工を提案することでお客さんの関心を引き、これを営業ツールとして育て、新規開拓にも活用していきたいと思っています。

本紙　一般印刷とは別に、特殊加工へのウエイトを置いた経緯についてお話ください。

鬼頭　当社は1950年、先代社長が活版印刷業として創業したのに始まります。私は1985年に入社し、活版印刷の先行きに不安を感じ、順次オフセット印刷に切り替えを始めました。そして、いち早くDTPの内製化を図るとともに、デザイン部門を立ち上げました。そうした動きのなかで、デザイナーからの仕事でよく使われる、特殊印刷への関心が高まり、油性インキで銀蒸着紙や特殊紙への印刷を、手間と時間、試行錯誤を繰り返しながら挑戦を始めました。他社ではやらない、小ロットで手間がかかる、しかも、嫌がる仕事を採算面を度返し手掛けてきました。差別化を図ることと、一般印刷での激化する過当競争に巻き込まれたくないという考えから、特殊加工への歩みを模索したわけです。

本紙　相当ご苦労があつたようで。

鬼頭　苦労はありましたが、その努力が功を奏し、年々受注量も増え、更なる飛躍のためUV仕様機を検討しました。その結果、2006年にUV+ニスコーター付き印刷機「RYOBI755」を導入したわけです。これにより、特殊加工のテリトリーが広がりをみせました。

そして、得意先の様々な要望に、アドバイスや提案を重ねながら拡販に務めてきました。その結果、UV印刷への可能性をさらに追求し、様々な製品の提供を目指したい、との強い要望が生まれ、「RYOBI755」との入れ替えで、「インラインUVキャスティング・フォイリングシステム」を導入したわけです。昨年のことです。同機は、箔とホログラムの両方がインラインでき、特殊表現や特殊効果をアピールするには最適な機械だと思っております。

本紙　一般のカラー印刷とは別に、印刷物としてもっと表現できることはないか、ということでしょうか。

鬼頭　特殊加工を利用することで、製品の差別化を図る、あるいは、効果を発揮させることができます。ただ、それをどのように活用していくかが課題です。広く知ってもらうためにも、印刷会社、広告代理店、デザイナーの方達とのコミュニケーションが大事になってきます。如何にコミュニケーションを上手く採りながら、最適な製品作りを進めていくか。箔やホログラムの効果的な使い方・見せ方をアドバイスできる営業スタンスが要求されてきます。

本紙　アピールしていくための算段はありますか。

鬼頭　サンプル帖とは別にカレンダーを試作しました。これなどは従来のものに比べ、一味も二味も違う訴求力が表現できたと自負しています。この試作の経験を活かし、カレンダー部門での拡販展開を模索していきます。また、箔、フォイリング以外にも、UVエンボス調印刷、レンチキュラー印刷、3D、特殊インキ印刷、ホログラムなど、同機の持つ多様性をアピールすることで、幅広い展開に拍車がかかるものと期待しています。

■印刷物は装飾品としての可能性を秘める

本紙　高付加価値印刷物の提案を。

鬼頭　私どもでは、特殊加工による「高付加価値印刷」の提供から、「総合価値印刷の提供」というスタンスを模索しています。印刷は装飾品だと思っており、手を加えればいろいろな可能性を秘めています。例えば、本来印刷物は、余計なデコレーションを付けることなく、製品そのものが価値とならなければなりません。しかし、市場ニーズの変化が印刷物にも多様性を求めてきています。箔・ホログラムは光を発するもので、光物といわれますが、その光物は、良かれと思って利用しても、使い方によって下品になってしまう場合が多々あります。裏を返せば、それだけ企画・デザインが難しい。しかし、光物は人の視線を集める最適なもので、高い訴求効果を発揮する印刷物となることも然りです。キャスティング・フォイリングシステムを一般カラー印刷と同じ感覚で印刷をする。むしろ、こうした印刷物を普通の印刷物として扱いたいと考えているわけです。

本紙　デザイン表現・色など、いろいろとチャレンジすることがあるわけで。

鬼頭　手前味噌になるかもしれませんが、特殊紙や蒸着紙へ油性インキで挑戦していた頃から、色についてはシビアな姿勢で臨んできました。私どもでは、「人を育てる」との基本方針から、入社5年間は色作りに専念させています。これにより全社員が特色を作ることができます。こうした取り組みで育んだ知識・経験が、新たな機械導入による展開にもスムースな立ち上がりを見せているといえます。オペレーターにも夢と意欲が生まれ、より一層前向きな姿勢が感じられます。納得の行くまで黙々とチャレンジしている姿に頭が下がります。

本紙　単なる印刷会社から物造りの印刷会社に脱皮が図られていると。

鬼頭　厳しい状況ですので、全体的に業績は横ばい状態ですが、商業印刷が下降している分、特殊加工で補っているのが現状です。これからは、武器と戦力を活かし、通常の商業印刷のほかに、幅広い範囲のジャンルに対応できる特殊加工を、素材や手法など、当社なりのアレンジを加えて提案していきたい、と思っています。

今後の歩みとしては、大ロットの仕事をワンパスでどんどんやるというスタイルではなく、小ロットの仕事を数多くこなすというスタイルをとっていきます。このスタンスは変りません。ですから、特殊加工をメインにするつもりはなく、商業印刷の一部門としての位置づけで展開していくつもりです。